

エッセイ 加藤定彦さんのこと

渡辺 憲司

加藤さんのことは、彼が国文学研究資料館の助手だった頃にも聞き及んでいただろうと思いますが、加藤さんの名前をはっきりと意識したのは、白石悌三先生の後任の名前が公表された時だったと思います。一九七六年です。

白石先生のお宅に呼ばれて、加藤さんがどんなに将来を嘱望されている人材であるかを聞かされたのを覚えています。加藤さんが立教に着任された頃の近世の夏合宿には、松崎仁先生はもちろんのこと、前田愛先生も毎回のように合宿に参加されていました。大学紛争中ゼミが休講になった時も夏の合宿は続きました。

合宿では、松崎先生をはじめ、宮本瑞夫さんや近藤瑞男君など、酒を飲まないまじめな演劇研究派と、白石先生を中心とする酒を嗜む程度の風雅俳諧研究派と前田先生や私をはじめとする酒飲み放埒？ 散文研究派があり、三派鼎立を保ちながら、何となく酒飲み派は、統帥の松崎先生に気兼ねしていたのですが、加藤さんの登場は、このバランスを見事に崩し、劣勢の酒飲み派が勢力を挽回したものでした。

しかし、加藤さんは、放埒派とは一線を画し、近世ゼミの風雅俳諧の伝統をしっかり守り通しました。白石宗匠が去った後は、阿蘭陀風談林もどきの前田先生や私の句に赤べん叱咤の評を手厳しく加えたものでした。

加藤さんが着任した翌年の、一九七八年に私は、梅光女学院短大の専任講師に着任し、この年に「山鹿素行と国文学」という論文を書きましたが、その時、葉書で実に丁寧な語句又論旨のあいまいさに訂正をもらいました。私は、一九八八年に立教大学に転じ、加藤さんと同僚になりましたが、加藤さんは、この時以来母校の先生であり、私の先生でありました。畏敬の念を抱き続けてきた恩師の一人であります。

加藤さんの学問的厳正さはおそらく誰もが感じていることだと思いますが、畏敬の念を私が抱くのはそのことのみではありません。

加藤さんは正義の人です。確固たる思想の持ち主でもあります。政治に曖昧なことが文学的立場だと、何時も逃避的で日和見的な私から見ればまぶしい存在でもありません。

学会などではあまり知られていないかもしれませんが、加藤さんの一面をはつきりと示しているのは、環境への鋭い視点です。又、東日本大震災の年の『大衆文化』（6号 2011年9月）に投稿された「瓢亭、不折、子規と三陸大津波―「海嘯」十四句を巡って―」は、抑制のきいた文体の中で、震災の悲劇を受け止める子規の思いに加藤さんの痛恨を重ねたものであったと思います。

立教大学で近世文学を学んだすべての者が継承すべきは加藤さんの社会正義への公正な判断です。加藤さんは、「海嘯」への子規の思いを最後に述べています。

「幾度も死の淵をさまよった深刻な体験が、過酷な状況に置かれた三陸の被災者たちへの抑えがたい同情となり、子規をして真率な「海嘯」十四句を結晶させたのであって、それによって子規はまた新聞「日本」の記者として最低限の使命を果たすことが出来たのである。」

この言は、加藤さん自身を、子規に重ねたものであるとも言えるでしょう。

加藤さんを送る近世ゼミ合宿が行われたのは、平成二十四年三月十七日、十八日でした。その時の「伊東温泉行漫吟集」から、

山望館に泊す

温泉はなくて魚は沢や浜の宿　釣虚（定彦）

安原女史から銘酒差し入れ

梅に酒愛でて別れの日となさん　釣虚

定さんぬる爛所望

腹にしむ爛は熱きと老教授　ヨセ風（憲司）

翌朝先発に

送られつ送りつ伊豆の春の旅　有祐

同じく先発

再会はいずれ何処の温泉にて
朋子

木下李太郎生家への途中

いとゆかし河津桜の朝の浜
みさと

同生家を見学

米惣の柱時計も日永かな
釣虚

電車待つ間浜に出て

師とともに浜流離はん逝く春を
亮太

熱海梅まつりに寄る

梅咲いて鶯雨にご機嫌よー
トーベエ

梅林は私雨か湯の煙
麻衣

旨酒を紙のコップに梅愛でん
めぐみ

腰据えて惜春の酒幾献ぞ
釣虚

名残惜し一泊のみの春の旅
猫愛(睦)